

「高齢化社会を認知機能を支える という視点からデザインする」

駒村 康平

慶應義塾大学教授・検討会座長

(ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター長)

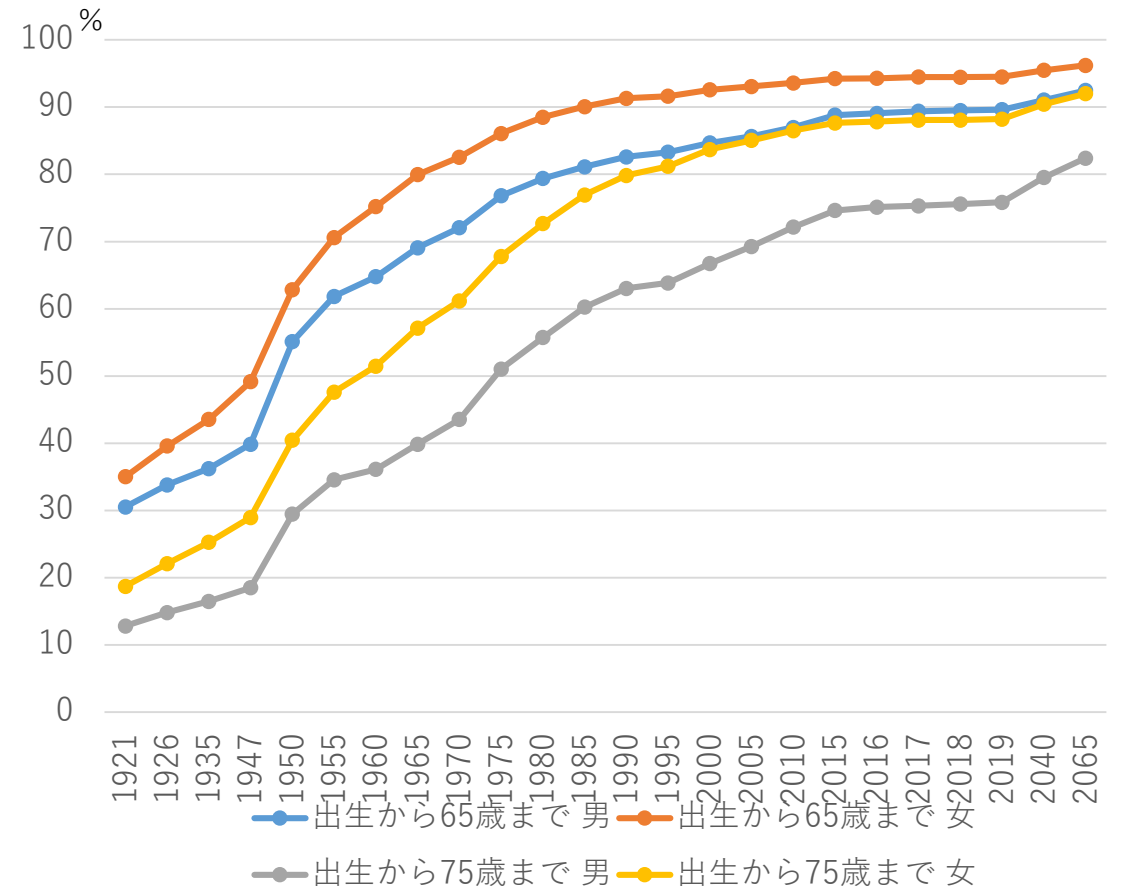
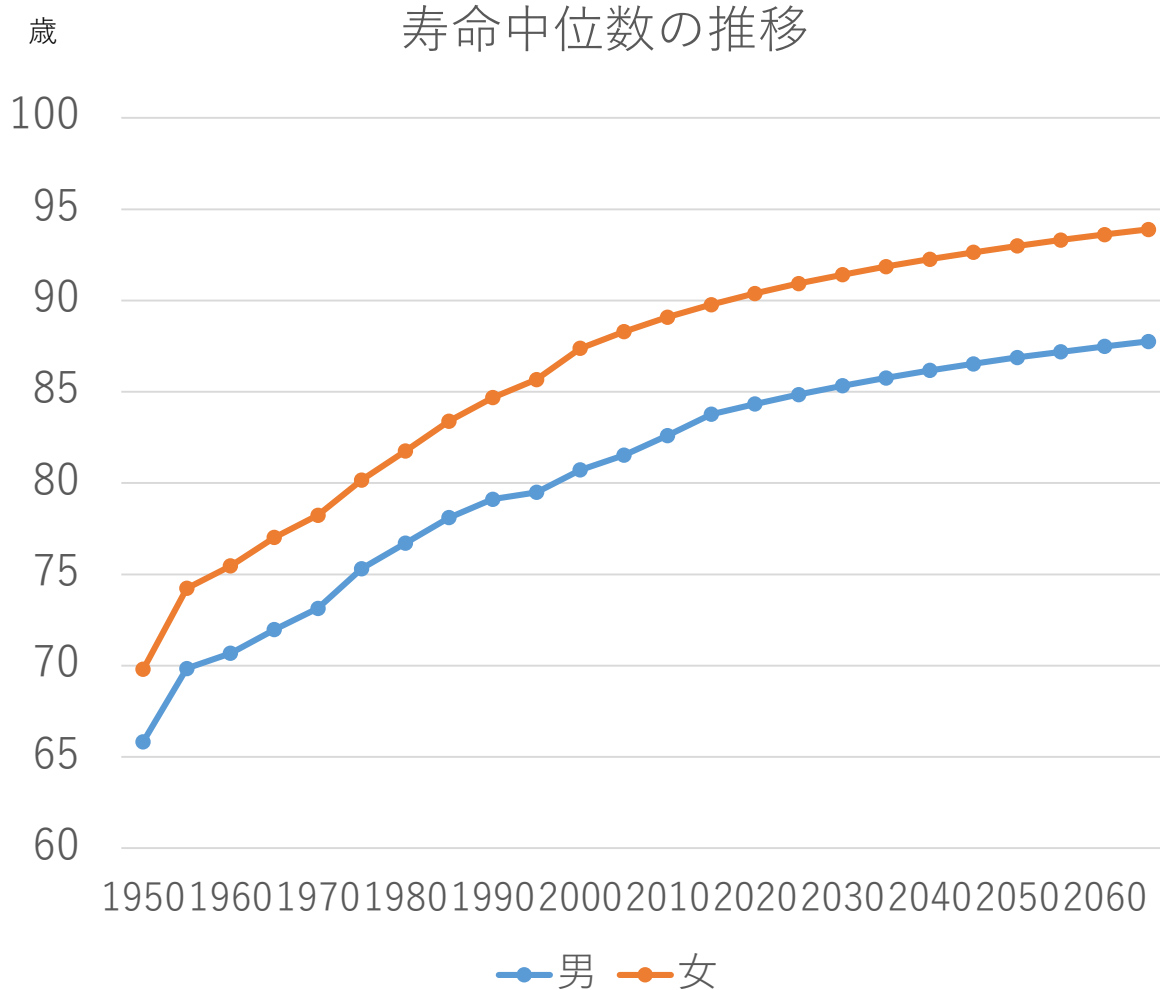
寿命90年の時代に突入する長寿社会

(国立社会保障・人口問題研究所日本の将来推計人口(平成29年推計)より作成)

寿命中位の推計

(男性87.8歳(+4)、女性93.9歳(+4.1))
90歳生存率: 男性40.9%、女性の66.7%

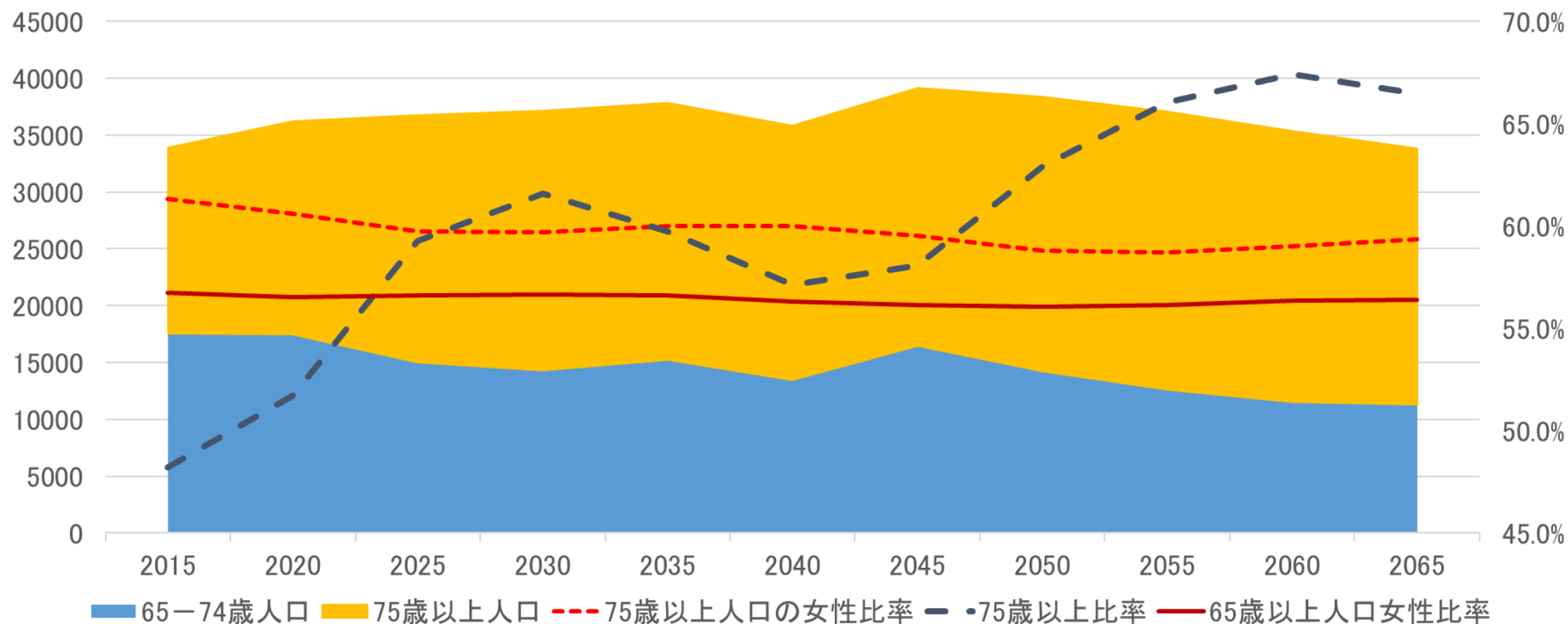
特定年齢(65, 75歳まで)生存率: 75歳までの生存率は**男性は82%(+7.8%)**、**女性は92%(+4.4%)**に



今後の高齢者数の見通し：75歳人口の動向

65歳以上人口の構成と「65歳以上人口に占める75歳以上人口」の比率（％）

65歳、75歳以上人口（人数（単位1000人）、75歳以上比率（％）、女性比率（％））の推計

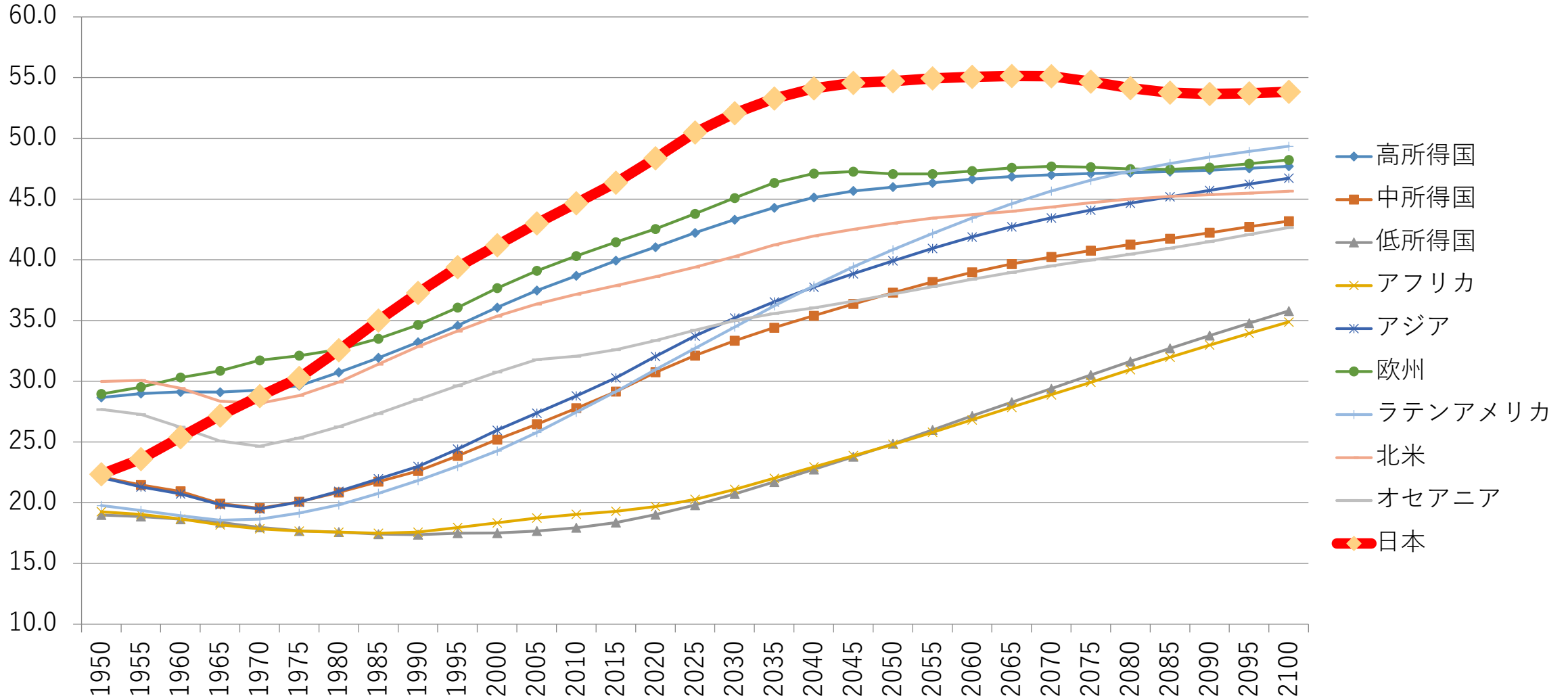


国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2017年）より作成

上昇する中位年齢

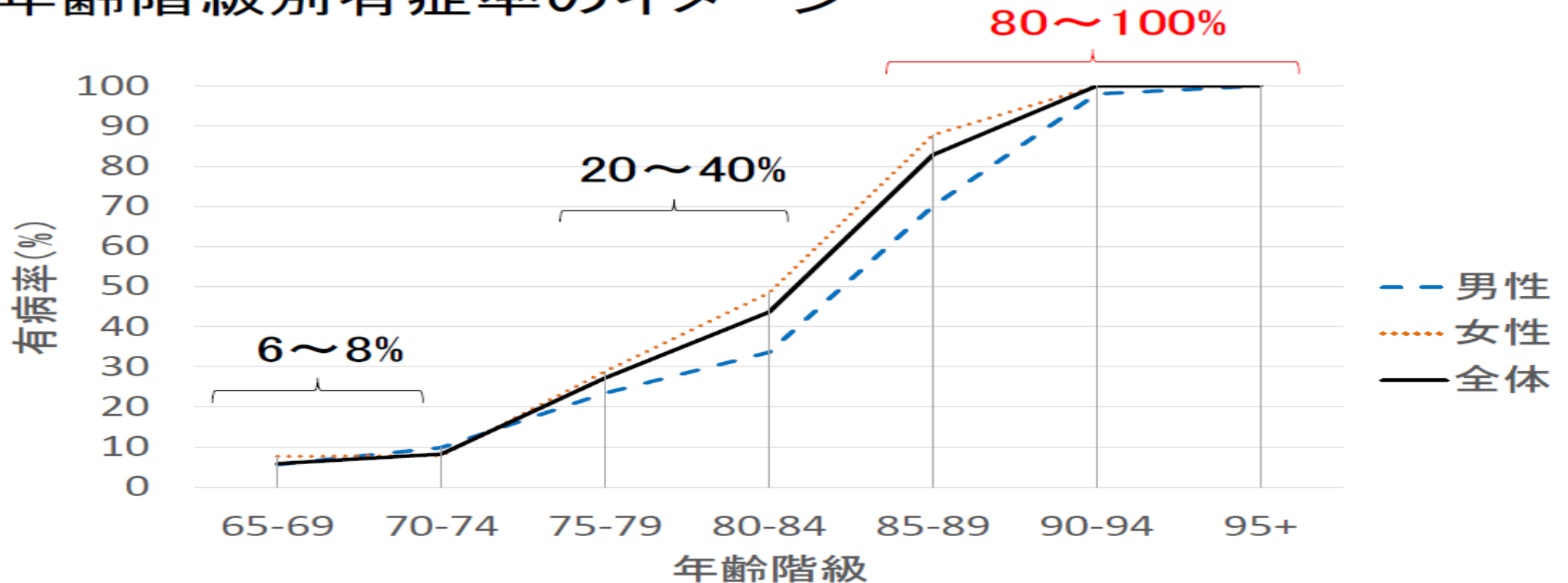
「1970年代は20代、2040年代は55歳」
→中高年社会に合わせた社会のデザインの見直し

歳



年齢別のMCIおよび認知症の有症率

高齢者におけるMCIまたは認知症の
年齢階級別有症率のイメージ



MCIの有症率が認知症の有病率とほぼ同等と見なして作成した。

超高齢社会におけるイノベーション

- 1：高齢になってもなるべく他人に頼らず生活を楽しめる社会を作りたい。（医療や介護のみの問題ではなく、生活に関わるすべての企業、団体、行政、市民等、地域社会全体で共有すべき）
- 2：高齢者目線の社会経済構造（社会のデザイン）になっていますか？（そもそも人口減少社会で、助ける人（若い世代）の数も減る）
- 「高齢者を助ける」という発想から、「自らできる」「可能性を引き出すようにデザインする」という発想に向けた社会の仕組みのイノベーション（狭い意味での「テクノロジー」による対応を超えた議論）
- 「インクリメンタル・イノベーション（パズルの隙間に新しいピースを組み入れる。）」→「アーキテクチャル・イノベーション（パズルの解き方を変える）」（社会経済活性化の鍵）
- 3：なぜ外出が減るのでしょうか？（孤立、引きこもりがち）
- 「疲れる（神経を使う。）」→なぜ疲れるのか？
- 4：なぜ高齢者はネットが苦手なのでしょうか？

認知資源と判断力（良く考えれば、よく見ればわかる？）



- 1：毎日35000回の判断を行っている。
- 2：認知資源（「集中力、注意力」）には限界がある。
- 3：「集中力、注意力」は年齢とともに減少してく。なるべく「楽」に判断したい。
- 「失敗したくない」
- 4：「良く考えればわかるでしょう？」
では「だめ」。高齢化社会では認知機能に負担を与えないで、理解できる構造に。
- 5：その注意に意味があるのか？「本館は、大変複雑にできています。お客様の皆様におかれは気をつけてください？？？」（単なるいいわけ、責任転嫁。）

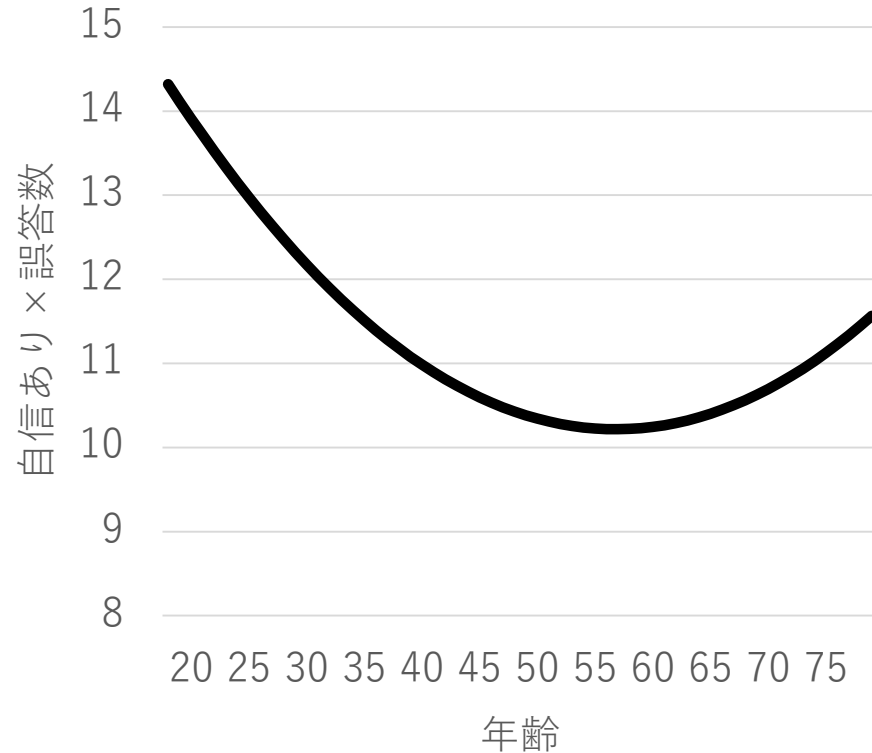
そのバス停の場所は？



- 1：4車線の道路を渡る高齢者
- 2：「横断禁止」の掲示は効果的か？
- 3：なぜ高齢者は渡ってしまうのか？
- バス停の場所（横断歩道まで80メートル戻る必要がある。面倒、体力面）
- 目の前に病院の受付がある。（急ぎたい）
- 4：意思決定の問題
「自信過剰問題」、
「ルール遵守意識の低下」（若い人と高齢者で共通した傾向）

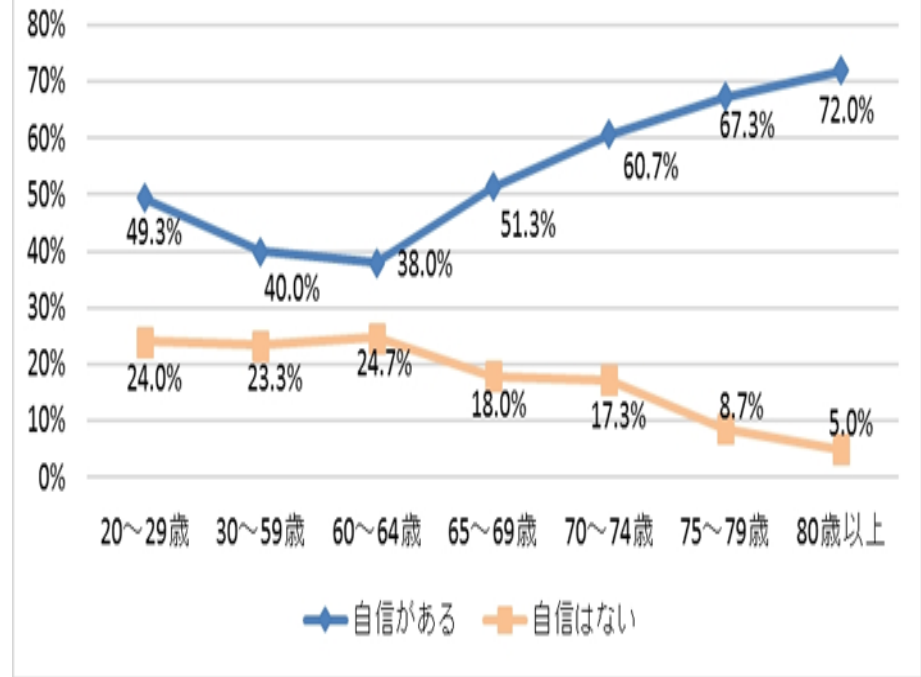
加齢と自信過剰問題

若い時に自信過剰、50歳代後半でボトム、
高齢者で上昇



岡本翔平・駒村康平（2018）「金融リテラシーはどのように形成されるのか：金融リテラシー調査を用いた分析」『生活経済学会関東部会報告』（金融広報中央委員会「金融リテラシー調査2016年調査」（インターネットモニター調査）を使った分析）

＜図表1＞運転に対する自信



出典：MS&AD基礎研究所株式会社（2017）「高齢者運転事故と防止対策」に関する調査結果

1：高齢者特有の選択行動の課題

1. 加齢に伴う認知機能の低下により、楽に選択しようとする。（これまでの「経験」や「直感」に依存した判断をする）

→ 「フレーミング効果（説明の仕方によって決定が誘導される）」を起こしやすくなる（詐欺の被害者の危険性が上昇）

2. 加齢とともに、多くの選択肢への対応が難しくなり、わかりやすい情報とシンプルな選択肢を好むようになる

→ 高齢者は若年者より**選択肢が少ない方**（半分程度）を好む

2：高齢者特有の選択行動の課題（続き）

3. 高齢者は、肯定的な感情的出来事や情報を記憶し、ネガティブな情報を忘れるあるいは注目しない傾向がある

→自分に都合のよい情報しか頭に残らない。

4. 年齢とともに集中力、注意力の切り替えが苦手になる。「急かされる、驚かされる」などが苦手。

5. 加齢とともに、客観能力以上に自信過剰になる。

→詐欺の被害者になる可能性が上昇する。

「認知機能の限界につけ込まない」

• 例

① 「ダークパターン 不利な選択に消費者誘導進む規制、企業も対応急ぐ」 (日経新聞2021年9月17日)

→1度のクリックで定期購読等に誘導 (スニーキング)

→偽って時間を区切って選択をせかせる「あと何分で終了」 (アージェンシー)

→定期購読のクリックを大きく表示する (ミスディレクション)

②クレジットカード、携帯電話の契約、通信販売、訪問販売

③日本高齢者向けで認知症官民協議会「認知症バリアフリー社会実現のための手引き」 (驚かせない、急かせない、自尊心を傷つけない)

④MCI、認知症に限らず高齢者全体の問題 (高齢社会の常識) として考える。
(認知機能の低下・限界につけ込み消費者に被害をもたらす商法、企業・団体は倫理的に許されないという意識 = スラッジの禁止 (悪いナッジ))

社会全体で理解すべき「メタ認知」

- 1：高齢者の認知機能の特性を理解して、社会の仕組みを考える。
- 2：「バリアフリーになっていますか？」
- 「スロープがあります。大きな字で説明しています??」→身体面のバリアフリーのみ（それは当然）
- 3：「認知面でのバリアフリーですか？」
- 「認知症サポーター講習を受けています」?? 「認知機能の変化＝認知症」ではない。
- その「表示、説明」（職員の姿勢）は簡単に理解できますか？（民間のみならず行政（自治体、政府も））。
- 4：提供者側の都合・視点でデザインされていないか？
- 5：認知機能が変化に対応した社会のデザインの重要性